

---

# 道具に恋する乙女達

鳳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道具に恋する乙女達

### 【Nコード】

N2641H

### 【作者名】

鳳

### 【あらすじ】

目の色が違うというだけで存在を否定されてきたアリス……  
・。アリスに恋する乙女達の日々の日常を描く物語

## 第一話 感情のある道具

・・・・・・・・・・暗い・・・・・・・・

明かりをつけると家族全員の死体が転がっていた・・・・・・・・  
血の匂いが充満しているのに吐かない俺はあるいみ凄いと思う、ただ気持ち悪いだけだ

顔面が原型を留めていない、腕がありえない方向に曲がっているモノやひたすら体に刺し傷があるもの・・・・・・・・

ところどころ見える服の部分が血で染まっていたら誰が誰だかわからないだろう

さっきまで頭が真っ白で、とてつもなく熱かったのに今は驚くほど冷めている・・・・・・・・

因みに狂ってはいないけど殺ったのは俺だ・・・・・・・・  
頭は至って正常、だが殺した理由が見つからない・・・・・・・・

いや、あるか・・・・・・・・・・とうとう恐れていた事が起きたのか・・・・・・・・

恐れていたって言うてもただ怒りを抑えていただけだけど

日々家族に俺の存在は否定され続けてきた・・・・・・・・何も悪いこととはしていないのに

母だけは僕を認めてくれた、だが父と姉と妹は別だ．．．．．  
日々僕を虐め続け、僕は虐待に耐える毎日、学校の男子からも虐め  
を受けた。女子からは直接的な虐めはなかったものの、陰口、避け  
るなどの行為はあった。

母とあいつだけだった．．．．．僕を認めてくれるのは．．．  
．．．

母が死んでからというものの元々嫌われていた僕は傷つけられてい  
た、ずっと

どうして足掻きもせずにその運命を受け入れるのか？、それは昔犯  
してしまった罪の償い．．．．．

あの日、幼馴染を殺してしまった罪の償い．．．．．

もう、何も信じられなくなりそう

心が抜け落ちて．．．．．  
涙も枯れ果てて．．．．．

もう．．．．．僕は道具だ．．．．．

感情も何もない．．．．．道具だ．．．．．

今まで残っていた僅かな感情もとうとう消え去り、彼の瞳からは光が消え去った

それから3年後

現在高校2年生

僕はアルフレア総合魔術学園へと入学した、全国でトップレベルの学校に飽きるという感情をなくした僕は機械のように勉強を続けた。そのおかげで一位で合格

3年前のあの事件後、記憶操作に操作を重ね、自分が殺してしまった人達、つまり家族がいた事さえ忘れさせて捕まりなどしなかった。  
.....

本当に最低だと思う

でも、後悔も反省などしない.....悲しみさえない.....

僕は感情のない道具だから

でも、最近少しずつ感情が戻ってきた気がする

確かに捨てたはずなのに

でも、感情が少しずつ戻ってきた事に嬉しいと思える感情が芽生えていた

「アリス・・・・・・・・遅い・・・・・・・・」

バキッという音とともに思いっきり蹴られたことを理解した瞬間に体が吹っ飛ぶ

先に紹介しておく、僕の名前は紅灯アリス。にんげんあかり

少し変な名前だと自分でも思うけど、僕を唯一認めてくれた母がつけた名前だからこんな名前でも感謝している・・・・・・・・

説明している間に光が遮られた．．．．．人の影で

「．．．．．すみません」

「私を待たせるなんて何時からそんなに偉くなつたのかしらねえ？」

僕を覗き込むように見ているのは僕の隣に住んでいる、あまみやあいら雨宮愛梨だ。  
俗に幼馴染というが僕の幼馴染はあいつだけだ

バキツという音とともに右頬を思いつきり殴られる

「次から気をつけなさいよ」

「．．．．．分かりました」

未だに痛む右頬を治療し、愛梨の後を追った。

今日は入学式だ．．．．この学校でも僕の存在は否定されるのだろうか？

僕の目は左が灰色で右が赤色

赤色はいいのだが、灰色の目、通称 忌み嫌われる者の持つ目、死人の目などと表される。

その為、目の色が違うだけで理不尽だけど嫌われ者になってしまう．  
．．．．．

存在を否定されると、やっぱり多少は傷つくものの、慣れてしまえばあまり苦ではない

校門から入った時点で僕は注目を浴びていた……  
こちらに刺さる視線は哀れみと下等生物でも見るかのような視線だけだった……もう慣れたけど

「ねえ、私に近づかないでくれる？あなたの恋人に見られたらいやだから」

「……分りました」

愛梨が唐突にそう告げてきた、一応一緒に行こうと誘ったのはあっちの方なんだが、命令だからな……

その場で立ち止まり、愛梨が10mほど離れたのを見届けてからまた歩き出す。

愛梨は男子からの視線を独占していた……

そりゃそうだろうな、ピンク色の髪を腰まで伸ばし、輝く赤色の瞳、整った顔立ち、これに振り向きもしない男は男じゃないな……  
って僕がそうか

この時は位置的に愛梨の表情は見えなかったが、後姿が妙に寂しげだった

「おい、何で嫌われ者がここにいるんだよ!？」

「……」

僕に話しかけてきたのは同じ高等部1年だと思われるデブ、この言葉にも慣れた



「おい、何とか言ったらどうなんだよ!!」

デブの拳が僕に当たると思われたが、不可視の空間装甲が僕を守っているため攻撃できない。デブの拳がフィールドに触れると同時に空間装甲が反応して光が発せられ、デブが吹っ飛ぶ

5 m程吹っ飛んだデブを見届けた後、禍々しい魔法剣を召喚し、上に放り投げる。

宙を舞う剣はピタリと静止し、一直線に飛んでいくが、僅かにずらしてデブの顔面の横に突き刺す。

冷や汗を流して啞然としているデブ。周りの皆も呆然としているそんな時が止まったような空間から僕は抜け出して校舎内へと入っていく

1 - Aか・・・クラス表を見た僕は自分の教室へと足を運ぶ

「アリスはこのクラス？」

右から愛梨に話しかけられる

「・・・・・・・・・・1 - A」

「な、何であんたが同じクラスなの!？」

思いつきり腹を蹴られ、吹っ飛ばされる。今回は不意に喰らったので軽装甲を張れなかった・・・腹に痛みが残る。

「・・・・・・・・・・すみません」

腹に治療魔法をかけながら謝罪をする。

「フンッ、あんたみたいな奴死ねばいいのよ」

そう言つて教室へと愛梨は向かつていった……

もう何回目だろうか……否定されたのは……  
自殺なんて苦しいだけかと思つてたけど、この状況から逃れる最善手じゃないんだろうか？

逃げるのは良くないかもしれないけど、対処法がない。今までの経験からして教師からも存在を否定されるだろう……

でも自殺なんてしない、生きて罪を償わなくちゃいけない

「あら？誰かと思えば奴隷さんじゃありませんか」

そう言つて話しかけてきたのが金髪で貴族なイメージを想像させるお嬢様の明月院めいげついんひな雛だ。

僕の事を奴隷として扱い、時にはとても酷い扱いを受ける。仮にも女王様がタイプとかはないから安心してほしい、これも罪の償いの一つだ……

茶髪を腰まで伸ばし、頭にはいつも白い力チューシャをしている、目の色は澄んだ青色でこれと目があつたら、目があつただけで骨抜きにされそうなほど可愛い……  
付き合える奴はラッキーなんだろうな……愛梨とはまた別な感じでの魅力を持っている。

「……何か言つたらどうなんですの？」

僕が何も言わなかったのがいけなかったのか、どんどん不機嫌にな  
っていく雛

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「フンッ、もういいですわ」

僕が黙っていると、雛がキレてシューズの爪先で思いつきり脛を蹴  
ってきた、僅かにダメージ軽減の軽装甲を張ってダメージをある程  
度は防ぐ事ができた。

雛はそのままどっかへ行ってしまった。

僕としては下手に怒らせないように無言でいたんだけどな・・・・・・・・

・

今更だが僕はキャラを作っているわけではないけど、発言を少しで  
もミスると酷い始末を受けるから極力無言で通している。

最近は多少の感情が戻ってきたからこうして考えていられるけど、  
昔は愛梨、雛、そして志保に忠実に従う道具のようなものだった・  
・・・・

最近でもあまり変わらないけど・・・・・・・・

志保は同級生、愛梨、雛と共に僕に対して酷い扱いをする存在

本名を水野志保という

髪はとても美しい水色で2つに結んでツインテールにしている、目  
の色は、雛と比べるとやや浅い水色、僕の周りには何故か、とても  
LVの高い美少女達が揃っている。この美少女達に釣り合う男など  
いるのかどうか分からない

しばらくして学校の鐘がなり、先生が入ってきた  
見た目は高校生ぐらいの女子生徒に見え、色違いだけどデザインが  
同じ服を着ているから、大抵の人は生徒と見間違えるだろう・・・

それにしても綺麗だと思う、緑色の髪を肩まで伸ばしたセミロング  
で目の色も緑色という緑で統一された、清楚なイメージがある綺麗な先生だった。

「私がこのクラスの担任の清水奈菜です、よろしく」

この笑顔に既に何人かの心が奪われている

「はい、皆さん自己紹介をします、じゃあ君から」

一人一人、自己紹介をしていく……………  
僕の番になった……………

「……………紅灯アリスです、よろしく」

僕が自己紹介をすると、皆がこっちに下等生物でも見るかのような  
目を向けてきた

何回も言っているけど、慣れたといっても多少の傷はつくもの……  
……だけどそれは仕方のないこと、僕はそういう運命に生きている……………

でも先生だけはニコニコと笑っていた．．．．だが、内心は皆と同じなんだろう．．．．

ここでも皆に否定される．．．．そう思うと目に涙が溜まっていくのが分かる．．．

最近取り戻した感情の中には悲しみもある．．．．僕だって人間だ．．．．泣くときは泣く．．．．だけど、今は泣けない．．．．

自己紹介が終わってこの高校の授業で使う色々な物を配布した後、チャイムがなった．．．．

僕は慣れない道を辿りながらも、校舎の地図を思い出し、屋上へと走り込み、ぺたんと地面に手について声を上げて泣いた．．．．

ただ泣いた．．．．

「．．．．うう．．．．僕は、ただ生きているだけなのに．．．．」

感情が戻ってきた．．．．悲しいと感じられるようになってきた．．．．

それが嬉しかった、でも悲しかった．．．．

未だに流れ続ける涙を必死に止めようと試みているが、全くの無駄だった．．．．

今まで否定された言葉の数々、感情がなかった何年間分の否定の言葉が頭を駆け巡っては涙を流した．．．．

気がついたら、後ろから優しく抱きしめられていた……………  
それはとても温かくて、優しくて、とても心地良かった……………

「泣いて、いいんだよ……………今まで辛かったでしょう？」

抱きしめられている手を握り締めながら後ろを振り向いたら緑色の  
髪を垂らした奈菜先生がいた……………

「私があなたを護つてあげる……………だから、もう一人で悲しまないで……………」

それが僕にとって救いの言葉だった……………  
僕は先生を正面から抱きしめ、先生の制服が汚れるからとかそんな  
事を気にせずにただ泣き続けた……………

しばらく泣き続けて泣き止んだ僕は、さっきまったく気にしていな  
かった、制服の汚れについて謝った……………でも、奈菜先生の  
魔法で落ちたからいいけど……………

「それと、私の事は奈菜って呼んでね」

「……………仮にも僕は生徒ですよ？」

「人前では駄目だけど、2人のときはいいの」

「……………分かりました」

先生の存在のおかげで僕の心の負担は大幅に減った、先生は僕の存



「……………なんて言ったの？」

「どうして私の前では感情を見せてくれないの!？」

一転して声を荒げて詰め寄る愛梨、反射的に2、3歩後ずさる

愛梨の言葉の意味が分からない……………

「……………?」

「どうして、私といるときは無表情なの? 私にも微笑んでよ……………  
私も抱きしめてよ……………」

人の存在を否定しておいて何を言っているのだろうか……………

「愛梨は……………僕の存在を否定し、僕は君の道具だ……………  
……………そんなことは出来ない……………」

そう、僕は道具だ……………道具は感情を持ち合わせてはいけ  
ないんだ

その時の愛梨の表情は悲しみに満ちていた……………



## 第一話 感情のある道具（後書き）

魔術学園の方も更新頑張るので宜しくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2641h/>

---

道具に恋する乙女達

2010年10月28日07時46分発行